

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 読みの目標が読解過程と理解に与える影響
-読解指導の応用に向けて-

氏 名 封 静 宜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、読解力中級と読解力上級の日本語学習者に「文章を読んで理解した内容を他者に伝える」という「伝達目標」と「論拠を示して読んだ文章に対する反論を書く」という「批判目標」を課し、読み手が、どのような認知的、メタ認知的行動を選択しながら文章を読み進めていくのか、そして、その結果どのような理解を構築していくのかを質的に明らかにすることを目的としたものである。

「第1章 序章」では、まず、日本語学習者の「読解力」を育成するためにはどのような状況設定が効果的と考えられてきたかの実践研究をまとめている。これまでも日本語学習者の読解力を育成する方法として「伝達目標」、「批判目標」を課す指導の効果が報告されているが、それらの課題状況において、実際に、どのような読解過程が生起し、その結果、どのような理解が構築されるかを質的に詳細に分析した研究が少ないことが指摘されている。この認識に基づいて、本論文では、「伝達目標」と「批判目標」を課題状況として設定し、その状況下における読解過程と構築される理解表象を分析することを目的とするという研究課題が示されている。

「第2章 理論的背景と先行研究」では、まず、認知心理学の枠組みに基づき、本論文の研究の枠組みとなる読解過程モデルが提案されている。本論文では、読解を、目標に合わせて、外界から与えられる文章情報から意味を引き出し(理解)、情報の欠落や理解のズレを推測・予測により埋める(問題解決)という一連の行動から成り立つと考える。その上で、言語能力、読解力、読みの目標が読解過程と構築される理解表象にどのような影響を与えるかに焦点を当てた先行研究の知見が検討され、その結果に基づいて、本論文においては「伝達目標」と「批判目標」の設定に繋がる課題を日本語読解力に差がある学習者に課し、目標差と読解力の差がどのように読解過程と理解に影響を与えるかを明らかにするという目的が示されている。

「第3章 研究方法」では、本論文の研究方法が解説されている。本論文では、日本語学習者に読解力測定テストを課し、その結果に基づいて読解力中級、読解力上級

の読み手を決定した。それらの読み手に「伝達目標」と「批判目標」を課し、読解過程、及び「伝達用文章」と「批判文章」を産出するまでの過程における認知行動を含む行動連鎖を示す資料が、発話思考法、再生刺激法、事後インタビューによりデータが収集されている。

「第4章 目標の差が読解力中級の学習者の読解過程に与える影響」では、「伝達目標」と「批判目標」という目標の差によって、読解力中級の読み手の読解過程におけるメタ認知行動の連鎖、認知行動の連鎖、構築される理解表象はどのような影響を受けるかが検証されている。分析の結果、「伝達目標」が課せられた読解力中級の読み手の文章読みの段階では、部分的な理解を目的とした認知行動が観察され、語、句、または文単位の命題レベルの理解表象が構築されていることがわかった。さらに作文前の段階になると、文章の全体的な理解を目的とした認知行動を示し、テキストベースの理解表象が構築されていることが示された。一方、「批判目標」が課せられた読解力中級の読み手の文章読みの段階では、理解の矛盾、自分と作者の主張のズレを文章の文脈と自身の知識に統合しようとする認知行動を示し、状況モデルの理解表象を構築している。そして、作文前の段階になると、文章読みの段階から得た理解を更に自身の知識で再構築して、より深い状況モデルの理解表象を構築していることが示された。

「第5章 目標の差が読解力上級の学習者の読解過程に与える影響」では、「伝達目標」と「批判目標」という目標の差によって、読解力上級の読み手の読解過程におけるメタ認知行動の連鎖、認知行動の連鎖、理解はどのような影響を受けるかが検証されている。分析の結果、「伝達目標」が課せられた読解力上級の読み手の文章読みの段階では、全体の意味を理解するための要点の把握のための認知活動を示し、テキストベースの理解表象が構築されていること、作文前の段階では、文章読みの段階で理解した情報の取捨選択をしているだけで、文章読みの段階の理解表象が維持されていることが示された。一方、「批判目標」が課せられた読解力上級の読み手の文章読みの段階では、作者の主張を特定しながら、タイトルを取り巻くキーワードを文脈と自身の知識により整理し、その具体的な内容を把握しているだけでなく、それらを有機的に結びつけた結果、文脈と自身の知識による文章内容を整理し、特徴を示す状況モデルの理解を構築していることがわかった。さらに、作文前の段階では、反論するために、自分の知識により反対する根拠を示し、自分の主張を示す認知活動が観察された。このように、自身の知識による理解を再構築し、文章内容を越えた状況モデルの理解を構築していることが示された。

「第6章 考察」では、第4章、第5章の結果に基づいて、同じ目標に繋がる課題を課せられたときに、読解力に差がある読み手は、その読解過程でどのようなメタ認知行動の連鎖、認知行動の連鎖、理解を行うかの考察が行われている。その結果、伝達目標に繋がる課題が示された読み手の読解過程では、読解力中級の読み手の場合は部分的な理解をするためのメタ認知と認知行動を行い、語、句、または文単位の命題レベルの理解表象を構築していることを示しているのに対して、読解力上級の読み手

の場合は、全体的な理解をするためのメタ認知と認知行動を行い、テキストベースの理解表象を構築していることが示された。さらに作文前の段階では、伝達する価値がある部分を【焦点化】し、その重要度を【検証】し、伝達という【目標設定】をしてから、それらの情報を伝えるための【計画立案】を行うという行動連鎖が観察された。理解においても、作文前の段階では、読解力中級であっても読解力上級であっても伝達する価値がある文章情報の位置づけを把握し、テキストベースの理解表象を構築していることが示された。一方、批判目標に繋がる課題では、読解力の差によらず、読解力中級であっても読解力上級であっても「作者の論点を特定し、その妥当性を吟味して、反対の理由と根拠を示す」という【目標設定】を行い、その目標を達成するために読み進めていることが示された。さらに【文法知識の利用】により、作者の論点を特定し、論点に関わる関連性のある語の【照応関係の指摘】を行い、キーワードを結び付けて、文章情報を自分なりに整理しているという状況モデルの理解を構築していることが示されている。

「第7章 結章」においては、本論文の結果と考察に基づいて、読解指導への示唆が述べられている。リアリティのあるメタ認知を促進する課題を設定することによって、読解力中級の読み手であっても、読解力が高い読み手と同様の認知行動、メタ認知行動が読解過程で促進されるという結果から、目標設定に繋がる課題状況のデザインの重要性が提言されている。最後に、本研究の残された課題について言及されている。